

県産大豆の豆腐加工適性比較 (普及に移すべき品種の選定における農商工連携)

支援先

茨城県農業総合センター農業研究所

【研究の背景】

県産豆腐用大豆は「タチナガハ」が主力品種ですが、「タチナガハ」は、多収・良質で倒伏に強いという特徴があるものの、青立ち症状が問題となっています。『青立ち』は『莢は成熟していても茎葉が青々としている状態』のことで、収穫時の刈り遅れによる減収と品質低下が生じます。

そこで農業研究所では、「里のほほえみ」「サチユタカ A 1」「フクユタカ」を新たに普及に移すべき品種候補として検討しており、当センターは品種別の豆腐製造試験に取り組みました。

【研究の目的】

「タチナガハ」「里のほほえみ」「サチユタカ A 1」「フクユタカ」において、豆腐製造試験を実施して品種間の加工適性比較を行い、県農林水産部による「普及に移すべき大豆品種の選定」を支援することを目的としました。

【研究の内容】

県産大豆品種の豆腐加工適性を比較するために以下の評価項目にて豆腐製造試験を実施しました。

- 1) 大豆子実の品種間比較試験（百粒重等）
- 2) 豆乳の品種間比較（pH、色調等）
- 3) 凝固剤別・品種別の豆腐硬度測定
- 4) 豆腐の官能検査

官能検査における総合評価の平均値は、豆腐凝固剤として硫酸カルシウムを使用した場合は、「里のほほえみ」は「タチナガハ」と同等でした。そして、グルコノデルタラクトンと塩化マグネシウムを凝固剤として使用した場合は、「里のほほえみ」は他の3品種よりもやや高いという結果になりました。

【普及に移すべき品種の選定結果】

県農林水産部では、農業研究所の栽培試験結果と当センターの豆腐製造試験結果から、青立ち症状が発生しにくく子実が大粒で良質という特徴をもつ「里のほほえみ」を県の認定品種として選定し、普及に移していくことを決定し、県報第 2679 号（平成 27 年 4 月 2 日）に掲載しました。



図 1 「里のほほえみ」



図 2 豆腐の硬度測定



図 3 官能検査用の豆腐

基礎となった事業

平成 26 年度 試験研究指導費（標準）

現在の担当部門

地場食品部門 部門長 中川 力夫 TEL:029-293-8576
技 師 野口 友嗣